

中国西南部・雲南省における 少数民族の生活変化とアイデンティティに関する研究

平成 19 年入学
派遣先国：中華人民共和国
堀江 未央

キーワード：雲南省，少数民族，アイデンティティ，改革開放，ラフ族，チベット族

対象とする問題の概要

中華人民共和国は、1949 年の新中国成立以後、少数民族を国家の枠組みのなかに取り込むためのさまざまな政策を行ってきた。それらの政策は、社会主義国家としての歩みのなかで何度か大きな転換を経験している。民族識別工作、文化大革命、そして 1970 年代末からの改革開放政策に伴う市場経済の導入などのめまぐるしい動きのなかで、彼らの生活は急速な変化を余儀なくされている。特に改革開放政策以後の変化は急激で、加速する大規模な人口流動に伴って少数民族集住地域にも漢族が多量に流入するようになっている。また、文革期における民族文化への批判的政策から一転しての民族文化観光業の勃興も、彼らの自己認識に大きな変化を与えているはずである。

研究目的

中国の少数民族を扱う上で私がフィールドとする中国西南部・雲南省は、ミャンマー・ラオス・ベトナムとの国境をまたいで様々な民族が居住する地域である。また、タイと雲南省とを結ぶ高速道路の建設などで、漢族の労働力が大量に流入している地域である。彼らの流入が少数民族にどのような影響をもたらすのか、という点に注意を払いながら、「辺境」「少数民族」という中央からの位置づけとは異なる彼ら自身の世界観はどのようなものなのか、またそれがどのように変化しているのか、生活実態のレベルとアイデンティティという内面のレベルの両方から明らかにしたい。今回は初めてのフィールドということもあり、サーベイとして雲南省各地の少数民族の生活実態を観察することと、労働者として近年流入している漢族を追うことを目的としてフィールドワークを行った。



写真 1 多様な民族の民族衣装(楚雄彝族博物館)

労働者として近年流入している漢族を追うことを目的としてフィールドワークを行った。

フィールドワークから得られた知見について

調査のなかで特に関心を持ったのは、ラフ族とチベット族である。ラフ族はチベット=ビルマ語系に属し、雲南省から大陸部東南アジア北部にかけて居住する民族である。彼らはキリスト教への集団改宗で知られるが、今回の調査ではキリスト教徒と非キリスト教徒の両方の村を訪れることができた。思茅市瀾滄県には主にラフナとラフシという方言集団が存在し、ラフナが多数派集団である。私の出会ったなかではラフナの多くがキリスト教徒で、ラフシにおいて非キリスト教徒の割合が高い印象を受けた¹⁾。私は特に非キリスト教徒のラフシに興味を持ち、共に行動させていただいた教官の研究との関係もあり、主に非キリスト教徒の集落を訪問した。その結果、改革開放以前は禁じられていた宗教活動が現在徐々に復興している様子を垣間見ることができた。また、私の滞在地域においてはミャンマー国境に南下するほど非キリスト教信仰の中心地に近づく傾向が見られた。これがどのような意味を持つのか、これからの研究の手がかりとしたい。



写真2 ラフシ（非キリスト教徒）の村の祭壇

チベット族については、省内でチベット族の最も多く居住する迪庆州香格里拉県を訪れた。当地では現在観光開発が進められており、彼らの生活は急速に変化しつつある。移動牧畜生活がそのまま公園で囲い込まれ、観光資源となっている現状のなかで、西藏（チベット自治区）とは異なる雲南省のチベット族としての自分をどう位置づけているのかに興味を持った。

第二の目的としていた漢族の流入については、西双版纳州のゴム農場（労働者の大半が漢族）を訪れることができたが、聞き取り調査を行うことは適わなかった。少数民族多数地域で個人商店を営む漢族には様々な場面で出会う機会があった。今後、彼らのネットワークや移動ルートにも注意を払っていきたい。

今後の展開・反省点

今回のフィールドワークでは、言語能力の不足と現地での様々な人間関係により、じゅうぶんに聞き取りを行うことができなかったのが心残りであった。また、対象民族を絞り込まずに行ったため、事前の基礎文献の読み込みが足りなかったことも大きな反省点である。結論として、調査地を瀾滄県（ラフ族）もしくは香格里拉（チベット族）に絞ることとなった。今後、現地で収集した漢語文献資料の読み込みをすすめ、両地における調査の可能性を探りながら、予備論文執筆に向けてさらなるテーマの絞り込みを行う。予備論文は文献資料を中心に据えて執筆し、本格的なフィールドワ



写真3 出発の朝（ラフシの村で）

¹⁾ 実際にはラフナとラフシの混住村も多くあり、この判断には留保を要する。

ークは予備論文提出後に行う予定であるが、現地の人びとの生活変化や漢族との民族間関係などを把握するためには定点観測の長期フィールドワークが如何に重要であるかということを感じた調査だったと言える。